

## 五会念仏について

講師 小林 順彦

五会念仏は唐代に活躍した法照が提唱した念仏である。法照の五会念仏を知る上で重要なのは、法照が長安で著した『浄土五会念仏略法事儀讃』（以下、略本）と、敦煌で発見された『浄土五会念誦観行儀』（以下、広本）の二書であることは異論無いところである。日本天台の念仏は、慈覚大師円仁が五台山で法照の五会念仏を導入し、改伝したものとされる。これは数有る概説書で必ず説かれるところであるが、その内容について考察したものは余り無い。現在天台宗で日常的に勤められる『例時作法』は、法照流の引声念仏とされるが、どこがどのように法照の流れを汲んでいるのかは、実のところ解明されていないのである。今後の研究が待たれるところである。

さて、法照の五会念仏において、広本・略本共に重要視されているのが、「天台智者廻向発願文」（以下、法照発願文）である。時宜に応じて取捨選択を許される五会念仏次第の中で、この「廻向発願文」だけは必ず最後に誦することを定めている。これは一体どういうことであろうか。

略本には「念仏三昧理事双修」「中道実相正観」などと説かれているから、五会念仏思想は天台の教学が背景にあることは疑い無いが、その構成は善導の流儀に依るところが多い。従って、かかる「廻向発願文」が次第に挿入され

ることは何ら問題無いが、実はこの「廻向発願文」自体には問題があるのである。即ちこの法照発願文では「上品往生」「六神通」といった語が列記されるが、天台大師の著述にこのような語を見出せないのである。天台大師に明確な阿弥陀浄土信仰の文が確認されない以上、ここで突然「上品往生」なる語が出てくるのは奇異と言わざるを得ない。

紙面の都合で原文は省略するが、天台大師には『天台智者大師発願文』（以下、天台本）という書が伝わっている。法照発願文は天台本と本文を異にするが、古来法照発願文が何を根拠としているのかについては、先学の意見に相違が見られる。塚本善隆氏は天台本の真偽は定かではないとしているし、佐藤哲英氏も同様の意見である。南条文雄氏は法照本の根拠を天台本ではなく、享保年間の浄土宗の僧東日が主張する『国清百録』所収の廻向発願文であるとしている。一方羽塚堅子氏は南条氏の見解を否定してはいるが、その根拠に対して論究されていない。塩入良道氏は法照文について取り上げるも、その真偽の程については触れていない。即ち何れの先学も、法照本の根拠については結論を出していないということである。

いま天台大師の発願文と考えられるものには、以下の四が上げられよう。

- (一) 『天台智者大師廻向発願文』（卍統蔵九九）
- (二) 『天台智者廻向発願文』（法照広本所収）

(三) 『法華三昧懺儀』五悔中の発願文(大正藏四六)

(四) 『国清百録』卷一、五悔中の発願文(同 右)

この四のなか、(三)についてみれば、確かに命終時に正念して安養に往生し、阿弥陀に面奉する旨が説かれている。しかし『法華三昧懺儀』は、後世に遵式によって手直しが加えられていることから、直ちに天台大師の見解と判断することは出来ない。一方、(四)は智寂が作成途中で死去したため、継いで灌頂が完成させたものであるから、天台大師の発願文としては、一応これが正当であると言えよう。しかしこれと法照発願文では整合性が見当たらない。翻つて、(一)と(二)は語句的に一致するところが見られる。そしてそれを補完するように、善導の『往生礼讃』との共通点も確認されるのである。

以上のことを要約すれば、天台本は浄土教の隆盛に伴い、天台を信奉する者達が『往生礼讃』等を参考にして、天台大師に仮託して作り上げた書であり、法照はそれを天台大師のものとして信じて、自著に挿入したと考えられるのである。